

# 視点

## 学ぶ意識を持てば、アルバイトは成長する一つのチャンスになる

●インタビュー  
**関口倫紀** 大阪大学 経済学研究科経営学系専攻 教授

せきぐちともき ● 1969年生まれ。専門は、人的資源管理論・組織行動論。University of Washington Foster School of BusinessでPh.D取得。2006年4月より大阪大学経済学研究科経営学系専攻 助教授（07年4月より准教授）。2012年より現職。



大学生がアルバイトをするこ  
とについては、さまざまな意見  
がある。「学生は本来勉強に専  
念すべきで、貴重な時間をアル  
バイトに費やすべきではない」  
といった意見や、「アルバイト  
にはキャリア教育の効果があ  
る」という意見もある。果たし  
て、学生はアルバイトとどう向  
き合えばいいのか。

大阪大学の関口倫紀教授は、  
『大学生のアルバイト経験と  
キャリア形成』という論文にお  
いて、アルバイトが学生の成長  
にどう影響するのか、調査結果  
をまとめている。その関口教授  
にご意見を伺った。

### 単純作業よりも スキル多様性が大事

——アルバイトに注目したきつ  
けは何だったのでしょうか？

関口 私はアルバイト研究の  
専門家というわけではありませ  
ん。もともとは、経営学で会社  
の立場を考えたときに、優れた  
人を採用することが一番大切な  
人ですが、その「優れた人」の  
定義とは何だろうと考えたこと

がきっかけです。学生の場合、  
実際の職務経験がないので、知  
識やスキルではなく、その人が  
持っている行動の特徴であった  
り、性格や考え方などが「優れ  
た人」の出発点になると考えら  
れます。最近よく言われる「指  
示待ち族ではなく主体的に自分  
で考えて行動できる人」という  
ことですね。

では彼らは、どこでそのよう  
な能力や特徴を身につけたので  
しょうか？ それは、生まれつ  
きの性格かもしれないし、経験  
によって得たのかもしれないけ  
れど、何なんだろうという問題  
意識がありました。

そうすると、ほとんどの学生  
はアルバイトをやっているので、  
一つの可能性としてアルバイト  
経験が考えられます。そこで、  
学生たちにアルバイトの特徴に  
ついて聞いてみて、それによっ  
て本人たちがどれくらい成長し  
ているのか調べてみよう、とい  
うことになりました。

この研究を行ったもう一つの  
理由は、調べてみると、アルバ  
イトに関する研究があまりな

かったということもあります。

——結論としては、どのようなこ  
とがいえるのでしょうか？ 学生  
はアルバイトをしたほうがいいの  
でしょうか？

関口 考え方としては、アルバ  
イトそのものが問題ではなく、  
学生の自分が成長するというこ  
と、成長に役立つものであれば  
何をやってもいいのではないか  
ということですね。学校の授業以  
外にも、自分の将来の成功に向  
けて成長する機会があれば、そ  
れをやってみてほしいというこ  
とです。

多くの場合、生活費を補うた  
めにやらざるを得ないというこ  
とでアルバイトをやっているこ  
とですが、大事なことは、ア  
ルバイトをやるときの意識とし  
て、そこから自分が何を得られ  
るのか、どんなことを勉強でき  
るのか、ということに常に考え  
ながらやることです。単に時間  
の切り売りで、自分の時間を時  
給1000円のお金に替えるだ  
けではなく、「賃金+a」で、  
そこでどれくらい自分が成長で  
きるのかを意識してやると、学

生生活全体として学習成果が高  
まるのではないのでしょうか。

——アルバイトを、学習機会の一  
つの選択肢として考えるというこ  
とですね？

関口 アルバイトが特徴的な  
は、将来を見据えたときに、働  
くということはある程度先取り  
して体験できて、他では得られ  
ない経験ができることだと思  
います。

——先生の研究では、アルバイト  
を質と量の面から見ているのが特  
徴的です。

関口 質に関しては、単純作業  
のアルバイトよりも、いろいろ  
なスキルを使うアルバイトのほ  
うが、成長する機会が多いとい  
えます。もう一つは、本人の心  
構えとして、単に言われたこと  
をやってお金をもらって終わる  
のではなく、よりアルバイト先  
の経営的な視点に立って、顧客  
サービスの改善を試みたり、さ  
まざまな提案をしたりすると、  
より学習効果は高まるでしょう。  
量に関しては、バランスが大  
事になります。アルバイトの時  
間が長すぎれば、他のことを学

ぶ時間が短くなりますので、逆  
効果になります。反対に短すぎ  
ても、アルバイトで学ぶことが  
なくなってしまう。つまり、  
適度な時間というのがあります。  
その適度な時間というのは、ア  
ルバイトの中身によって変わっ  
てきますし、おそらく、本人が  
意識して見いだすものだと思  
います。

もちろん、どれくらいのお金  
が必要かということもあります  
が、アルバイトを含めたいろい  
ろな面で自分が成長できるよう  
な最適な時間は、個人個人で違  
います。これが正しい時間とい  
うのがあるわけではありませ  
ん。

——具体的には、どのようなアル  
バイト先が理想ですか？

関口 職種というよりは、やり  
方を工夫する余地のある仕事で  
あり、かつ、雇用主がアルバイ  
トからの提案などに対してどれ  
くらい寛容かがポイントになり  
ます。雇用主によっては、決め  
られたことをきちんとやってく  
れさえすればいいという人もい  
ると思いますが、それよりはむ  
しろ、学生の成長のことも考え

てくれる雇用主の元でやると一  
番いいと思います。

——最近の学生は、どのようなア  
ルバイトをしていますか？

関口 学生の中には、意識の高  
い人がいて、この前は飲食業  
だったから、今度はトラック運  
転手、次は引越しの仕事を  
やってみるなど、意図的にアル  
バイトの中身を変えていく人が  
います。単純作業のアルバイト  
を続けても、天井効果で、ある  
程度のところまで、それ以上学

ぶことができると思っています。

### 人間関係的に 学ぶことが多い

——高校の先生としては、大学に  
入ったら勉強しなさい、という  
一般的な指導かと思いますが、  
アルバイトにもいろいろメリッ





トがありますね。

**関口** アルバイトの世界では、人間関係のところで学ぶことが多いと思います。すごく年長の方から、ちょっと年上のお兄さん・お姉さんの人、そしてお客さんなど、いろいろな人と接します。その職場での経験が長くなれば、後輩のアルバイトをまとめるなど、リーダーシップを発揮することもあります。大学の中では、先輩・後輩程度の少し狭い年齢差しかないと思いますが、そういう意味では、アルバイトでは人間関係的にいろいろ学べると思います。

——アルバイトの経験は、就職活動にも生かれますか？

**関口** 会社の面接などで何を話すかといったら、だいたい決まっています。大学での勉強、サークル、部活、アルバイトの話が大半です。ただアルバイトをやっていたというだけなら、ほとんど差が付きません。おそらく、みんな同じような話をするとだと思いますので、そういう意味では、アルバイトでも、自分の頭で考えて行動していたかど

うかが大切になると思います。

会社の人が見ているのは、行動力やコミュニケーション能力というのがありますが、やはり「考える力」が大きいと思います。単に言われたことや決まったことをやるだけではなく、工夫して考え、改善していくことができる人がほしいのです。そういう人は、5分や10分の面接でも、違いが出てくるものです。

——理系の場合でも、アルバイトの経験は生きてくるのでしょうか？

**関口** 理系であっても、社会人として働く以上は、人間関係的なことはありますし、年齢が上があればマネジメント的なことにも関わってきますので、理系的な技術や知識以外の学習の場が全く役に立たないわけではないと思います。

むしろ、人との付き合い方などは、理系の学生が苦手なイメージがありますが、意図的にアルバイトの場でいろいろな人と接するなどして、苦手な部分を強化することも有効かと思えます。

——サービスクラスを課せられたり



する「ブラックバイト」については、どう対処すればよいのでしょうか？

**関口** 学生が、ある程度、自分を守る知識や手段を身につけておくことが大事だと思います。具体的には、働く人は法律などで守られていて、当然、違反する雇用者がいたとすると、しかるべき手段を踏んでいけば勝てるはずなんです。学生の立場からすると、もしそのようなことになったらどうするのか考えて、調べてみると面白い。それ自体

が一つの勉強になります。

あとは、強く言うことです。アルバイトは特定の雇用契約で、それを超えて命令されたり、雇用主が約束を守らなかったりというところは悪いことなので、はっきりノーと言う。そのような勇気があるといいと思います。

——アルバイトとインターンシップの違いは何でしょうか？

**関口** 違いがあるとすれば、インターンシップは、アルバイトの機会がないような会社が行っ

ていることがあるということと、会社のことがよりわかるということだと思います。社員の人と接することができたり、会社の仕組みがわかったり、正社員として働くとはどういうことなのか、わかるような体験であれば、インターンシップはアルバイトとは特徴が異なると思います。

——インターンシップでも、アルバイトのように使われるケースもあるようですが。

**関口** 受け入れる会社としての意識が関係しているのかと思います。アメリカなどでは、インターンシップは採用の一つのプロセスとなっているので、会社も学生も真剣です。会社側は、もしかしたら正社員になってくれるかもしれない人を、1ヶ月〜数ヶ月かけてじっくり見極めようというモチベーションがあります。

ところが日本の場合、インターンシップと就職活動がある程度切り離されていて、あくまで社会貢献や教育として、学生に仕事の機会を提供することになっ

ているように思います。就職活動に有利になるので、インターンシップに行ったらという事実だけがほしいという意識が広まりかねません。

そうなる、会社にとっても学生にとっても、あまり意味のないインターンシップになってしまい、1〜2日のインターンシップに行ってみたら、会社案内だったということが起こってくるのだと思います。

——その点では、インターンシップよりも、アルバイトのほうが、会社と学生の利害が一致していると言えますか？

**関口** 一部の業界では、できるだけアルバイトを活用したいというのがあって、アルバイトに期待する役割はだんだん高くなってきていると思いますし、正社

員化への道を開いている会社も出てきています。学生にしてみると、昔より就職しにくくなっている、アルバイトで学べることが学びたいという意識が高くなっているというのがあり、と思います。

——高校でのキャリア教育についてはどう思いますか？

**関口** 個人的には、高校のキャリア教育は、高校で学ぶ教科の意味づけだと思います。高校の勉強は、たいてい大学受験のためになっていると思いますが、それでは少し寂しいと思います。もちろん、大学に合格することが、最終的にいい会社に就職することにつながってきます。ただ、本来のキャリア教育というのは、自分が将来何をやりたいのか、どんな道があるのかを知った上で、目の前にある教科と自分の将来がどうつながっていくのか、その結びつきを深めるような教育であるか、と思います。

——高校の先生へのメッセージをお願いします。

**関口** 私の教えている学部生は

ほとんど日本人なのですが、研究室所属の大学院生は8割が留学生です。留学生は、優秀だし、学習意欲も高く、積極的でない人が多いです。私は、日本人のなかにもそんな学生が増えてほしいと思っています。

日本人は、素直で物わかりが良いという面では、非常にいいところがいっぱいあるんですが、外国の人を含めいろいろな人を束ねるリーダーシップや逞しさが全体的に不足していると思います。それはある意味、そのような教育をやってきた結果なんです。おそらくこれからの時代は、勉強そのものも大切だけれども、それにプラスして、リーダーシップや交渉力、積極的に前に出て意見を言うことなどがすごく大切になってくると思います。そのような人は大学に入っても目立つし、社会で求められている人材なので、引っ張りだこになると思います。

高校においても、こうした人材の育成を期待したいですね。  
(構成／沢辺有司)